

「3・11」と山岳文化

山岳文化は趣味の世界か？

田 中 文 夫（神奈川県）

一、プロローグ

一昨年（二〇一〇）末、偶然にインターネット検索から野村仁氏の「山岳遭難史にみるリーダー意識の変遷（Ⅲ）」と出会いました。読みますと、私たちが三十余年前の山岳遭難が採り上げられており、久しく封印してきた琴線が弾かれた思いでした。すぐさま『危機とリーダー意識の考察』（初期の表題は「ヒマラヤ遭難登山隊から東日本大震災リーダー意識の考察」（A4版4冊））を書き始め、約半年かかってしまいました。

途上の昨年三月十一日、東日本大震災が発生。虚を突かれた日本政府の対応は、特に東京電力(株)福島第一原子力発電所事故対応でお粗末を露呈、今も社

会の批判にさらされています。

リーダー意識を考察していた中での大震災と、政府対応の稚拙さを目の当たりにし、急遽「クライシス・マネジメント」の第四章を書き加えました。その作文を遭難分科会へ送りましたが、反応はありません。野村氏はもとより、幾多の会員にも送らせていただきました。特に中村純二先生からは、「クライシスとリスクに分けて考える案に賛成」の返信を戴き、心強く論旨の展開を図ることができました。佐々木副会長とは電話で話しましたが、大震災や原発事故に対し、山岳文化として貢献出来ることが見当たらない感想で終わります。

二〇一一年四月二十七日発行の機関紙第三十四号に、学会として初めて3・11に関するコメントが載りました。山森副会長は『リーダーシップとメンバーシップの鍛錬が、咄嗟の判断に役立ち、自助、共助の役割分担をしたいもの』と書かれた。遭難分科会代表・青山理事は『リスク想定と、長期にわたる個々の危機意識に課題が残る』と書かれ、専門と

されるリスク研究の難しさを述べられた。また大野評議員は医学者の立場から、『体細胞の特性から被災者の役割分担や心の抛りどころ、心のケア』について書かれた。

山岳技術と山岳文化知識は、被災の中に在って有効な役割を果たすことは可能であります。しかし自然災害への備えと対処、人為災害への備えと対処といった事前の社会制度策定に対し、山岳文化人は参加や意識の対象外であったと思われまます。

日常生活において、山岳文化からの提言は何が可能であるのか、ないのか？所詮山岳文化は趣味の世界か単なる遊びなのか？これまで私が体験してきた山岳と論考、本業の電気設備設計技術者としての経験と知識は、東日本大震災被害や原子力発電事故への対処に、なにがしかの役割が果たせるのではないかと自問してみた。一般人及び職業人として普通な対処は当然可能ですが、山岳文化人としてどのようなことが可能なのか・・・と。

そこで私はヒマラヤ遭難登山隊リーダー意識の変

遷から、「クライシス・マネジメント」の提起は山岳経験の応用としてふさわしいと思ったのです。

『3・11とクライシス・マネジメント』は論集第十号への投稿論文としてまとめましたので、掲載なった暁にはご一読下さい。本論ではその細部を除き、山岳文化として何が成し得るか、考えてみたいと思えます。

二、「3・11」と山岳文化

私は二〇〇八年、論集第八号の「山岳登山体験による文化と文明解釈の試み」の中で、宇宙の中の人間から考察する文化と文明から、**文化**↓宇宙の必然性に逆らって享受する人間行為、**文明**↓宇宙の必然性に則って享受する人間行為」とする仮説の定義を試みました。

東日本大震災の主因となる巨大地震が、宇宙の必然における地殻変動と捉えるなら、それを災害として受け止めなければならなかった人間社会の一方は、「文明を享受することへの破壊（文明破壊）」となり

ます。それゆえに復旧・復興という文明行為を再開することになるわけです。

他方、必然に逆らうことを享受する文化の側面においては、文明破壊のもたらす悲劇と生命を失う悲劇の重層により、逆らうことへの恐怖がもたらされました。この面においては、文化を享受することへの破壊（文化破壊）が生じたのであります。しかし失った生命は復旧・復興できるはずがなく、その悲しみを乗り越えなくては文化の復旧・復興は成りません。それは人の心の問題であり、意識を変えて自然を受容できる精神こころに至らなければ、幸福へと辿り着くことはないでしょう。これが自然に内包される人間としての在り方、自己防衛となります。

また自然を客体として捉え、それを観察・観測・記述する人間を主体とした近代哲学や科学思考の面から、主体の崩壊は文化の崩壊となります。自然と対峙する人間の主体性復活をいかに成すか、近代社会にあつては、目的達成へのロジックが不可欠とな

ります。リーダーシップとは、その目的を社会に指し示すこととなります。

しかし東日本大震災は、人間の主体的存在意味に大きな疑問を投げかける契機を与えてくれました。主体（人間）が制御しきれない客体（原発事故）の創出と、便利だからとそれを活用してしまう文明の危うさ。主体（人間）が想定してきた文明（人工）社会を、客体（自然Ⅱ地震・津波）はいとも簡単に破壊してしまった事実。その結果、主体（人間）は客体（自然）を搾取し尽くすのではなく、主体は客體の一部であるから客体と共に在らねばならない、とする環境思想が一層説得力を増したのです。

経済優先社会の中で人々は、環境思想概念の正しさを理解できても、いざ現実の利便さと快適さからは経済優先、GDP優先の物質文明にどっぷりと浸かった文化を味わっています。しかし大震災の現実を目の当たりに体験してみると、「百聞は一見に如かず」です。日常として身近で大切な人・物・事は、失って見ないと気付かない人間の愚かさを教えてく

れました。知識は一体何を学んでいたのでしょうか。

そこには知識だけでは身につかない、「体験」という第六感までを含めて味わう、「心身の経験」過程を要するのです。山岳自然体験が貴重な過程となっていることは、私自身の文化財産であります。

「日常社会」の中にあり、意図的に山岳の「非日常社会」を体験することが、どれほど「日常社会」の無意識な慣れにとり、改めて自覚という意識を与えてくれることでしょうか。そこに山岳文化の大きな存在意義があると思うのです。

大震災と原発事故の非日常性から回復のために、山岳文化は直接的役割を果たすことができません。

しかし「日常生活の幸せ」に無意識となってしまう知識（常識）にとつて、「非日常の山岳自然体験」による気づきこそが、思いもよらぬ突然の災害に対しても、主体の自立と共存意識を保てる心の成長を促します。震災後の日本社会でそれは、「絆」という目に見えない心の糸（文化）で表現しました。つまり知識ではなく、意識するという文化形成なのです。

ヒトを宇宙における量子的存在に例えてみると、現代の民主主義は人に量子的自由をもたらし、現代社会をカオスの世界と化しつつあります。過半数を獲得できず何も決められない現代政治は、量子のカオス現象に類似しています。カオスの中から何を目的として意志形成できるか、今、人類は新たな「哲学（思考）」が希求されているでしょう。その一つに、山岳自然体験を経た山岳文化が、役立つのではないのでしょうか。

もしそうでないとしたら、「山岳文化は趣味の世界」で、茶飲み話しや酒の肴、ヒーローを崇める程度でしかないと思う今日この頃です。

(2012.06.02)

田中文夫（たなか ふみお） 一九四六年、神奈川県生まれ。
建築設備士 ㈱システム・デザイン代表取締役。 旧・山岳
展望 第二編集同人。 七四、七八年P29南西壁、他。
著書『青春のヒマラヤに学ぶ』（文芸社）、『頂きのかなたに』
（日本文学館）、『ヒマラヤの贈り物』（丸井工文社）